

オオカミの誘惑

2005(平成17)年3月27日鑑賞心齋橋パラダイススクエア



第2章

やっぱり楽しいのが一番!

監督・脚本・脚色=キム・テギョン/原作=クィヨニ(河出書房新社刊)/出演=チョ・ハンソン/カン・ドンウォン/イ・チョンア(シネカノン配給/2005年韓国映画/115分)

……今韓国1番の人気俳優は、ヨン様でもイ・ビョンホンでもなく、若手イケメンスターのカン・ドンウォンとのこと。もう1人のハンサムボーイはチョ・ハンソン。たしかにご両人ともカッコいい。18歳の女の子の視点で書いた夢いっぱい(?)のインターネット小説だから、こんなストーリーになるのも当然かもしれないが、これで人気沸騰というのはどうも……? 何でも「韓流イズベスト」というわけにはいかないようだ……?

原作はインターネット小説

この映画の原作は、韓国の18歳の女の子クィヨニが書いたインターネット小説で、日本語訳は清水由希子。18歳の女の子の最大の関心事、それは誰でも恋。自分を主人公にして、どんな男と、どんな風に出会い、どんな風にその恋愛模様を展開させ、そしてその結果をどのように……? さまざまに想像たくましくしていけば、その可能性は無限に広がるはず。そして、そのストーリーには、現在ニッポン放送の株式の買収劇をめぐるライブドア VS フジテレビ間で展開されている攻防戦の中で、3月24日に突如登場したSBI(ソフトバンク・インベストメント)のような(?)ホワイトナイト(白馬の騎士)がきっと登場するはず。

このインターネット小説の原作者クィヨニさんは何とも欲の深い女の子。なぜならその最初の設定は、無茶苦茶カッコいい男の子としてチョン・テソン(カン・ドンウォン)とパン・ヘウォン(チョ・ハンソン)の2人を登場させ、女主人公のチョン・ハンギョン(イ・チョンア)はその双方から熱烈なラブコールを受けるといふものだから。こりゃ女主人公にはメチャおいしい設定のはず……?

何とも都合のよい素材がズラリ……

さらに、イケメン男2人から同時に愛されるだけでは能がないため、原作者あるいはこの映画は、ストーリー展開に華を持たせ、また涙を誘うためにさまざまな素材を散りばめている。その1つは、テソンの出生のひみつ。テソンがハンギョンを「姉さん」と呼ぶのはそのためだ。そしてもう1つは、テソンの難病……？ さらに18歳の女の子らしい気配り(?)は、ハンギョンに嫉妬しさまざまな策略をしかける、いかにもイヤなキャラの同級生の女の子を登場させたこと。男のオレにはよくわからないが、女同士の嫉妬がうずまくドロドロした世界は、日本の徳川時代における大奥でも、この韓国の高校でも全く同じ……？

ヒロインの美人度は？

この原作を映画化するについてキム・テギョン監督は、ヒロインの美人度についてはかなり気を遣ったよう。だってイケメン男2人からラブコールを寄せられるヒロインなのだから、女性客からは嫉妬の目で見られるのは当然で、あまり美人すぎると逆効果……？ そこでキム・テギョン監督は、ちょっと冴えない田舎風(?)の女の子チョン・ハンギョンの役にイ・チョンアを起用。このイ・チョンアは、ホントは『冬ソナ』のチェ・ジウに似た美人なのかもしれないが、この映画ではかなりボケたキャラを出しているし、顔をクシャクシャにして泣くシーンが多いから、その美人度をうまく隠している……？ それで、新人賞を総ナメにしてこの映画が韓国で大人気を博したことの1つの要因……？

若手2大イケメンスターとは！

「今韓国で1番人気の俳優は……？」というと、『冬ソナ』のヨン様でも『美しき日々』のイ・ビョンホンでもなく、このカン・ドンウォンとのこと。たしかにこの映画でハンギョンを姉さんと慕うケンカっ早いけれどもちょっとナイーブなテソンを見ていると、その人気ぶりがよくわかる。イケメン男優のもう1人は、豪華な車を乗り回し、子分たちを大勢従え、女の子からモテモテのパン・ヘウォンを演じるチョ・ハンソン。

テソンが「姉さん」と思う気持からハンギョンに恋をしたことは一応理解できるが、私にわからないのは、このどんな女にもモテモテのヘウォンが、なぜこのダサイ女ハンギョンにホレたのかということ。その合理的な説明は全くなされていないため、私としてはどうも納得できない！ もっとも、18歳の女の子の書いた、夢みtainaまたマンガみtainaストーリーなのだから、56歳のオッチャン弁護士が目くじらをたてて文句をつけるほどの問題ではないかもしれないが……。

中盤はちょっと退屈……？

要するにこの映画は、ヒロインであるチョン・ハンギョンをめぐる2人のイケメン男子のアプローチ合戦、そしてその過程の中で生まれる2人の男の間の熱い友情も一緒に描こうというものだから、そのためのネタを次々とつぎ込んでくる。しかしそこは所詮18歳の女の子の原作……？ ストーリー展開がすぐにバレるし、見えすいたような同級生たちのお芝居で、3人の主人公が順番に傷ついたり、騙されたり、また仲直りしたりと、ワザワザ話をややこしくさせていくような中盤の展開はちょっと退屈……？ しかし、ネタはわかっているけど、ラストでのお涙頂戴シーンへの持っていき方は、それなりに工夫されたものと少し感心……。

『サマリア』と『酔画仙』に期待

この映画は事前の評価はあまり高いものではなかったが、韓流映画だし、若手イケメン俳優2人が出演する映画だから、私はそれなりに満席になるのではと予想していた。しかし、日曜の夕方観に行ったにもかかわらず、何と観客は10～15人程度。小さな女の子2人を連れたオバチャン2人という4人連れの他は、アベックが数組で、1人客は私だけ……。さすがに日本の観客は目が肥えている……？ というより、ちょうど3月26日から『アビエイター』などの大作が公開されたため、目がそちらにいつているだけ……？ 私としても、近いうちに韓国映画の近時の本命(?)であるキム・ギドク監督の『サマリア』やチェ・ミンシク出演の『酔画仙』を観なければ……。これはきつと面白いはずだと期待しているが……。

2005(平成17)年3月28日記